

気持ち、誰かがやってくれるのではないかと、いう期待感が優しさの邪魔をします。

そんな邪魔な気持ちを働かせないように、困っている人にサツと手を差し伸べるのが出来るように、意識と体を生まれたままの素直な状態に調えていく、ひとつの訓練としてあるのが坐禅です。

せっかく仏教の智識を学んでも、頭で理解しただけでは、仏教を学んだ価値が半減してしまいます。外から学んだ智識と、内から育む心、この二つが相乗効果となって、意識が日常生活のあらゆる場面で、素直に手足の動きとなって現れてこそ、仏教が生き活きと生きてくるのです。

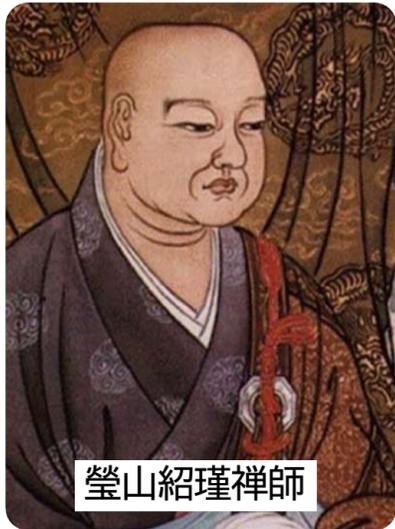
のとき、殻の内側からも真実の心が動き出しました。

曹洞宗大本山總持寺開山の瑩山禪師は、その著『伝光録』のなかで次のように述べています。

「阿難と召す、恰かも谷神の喚ぶが如し。響を阿難に離れず。石の火を離れず。」

この呼応のなかに禅の神秘があるのです。この場面は正法眼蔵そのものです。釈尊の侍者たること二十年、迦葉に侍従すること二十年、あわせて四十年間の総決算が、この「はい」の一語だったのです。

そこで迦葉がつづけ



瑩山紹瑾禪師

「門前の刹竿を倒してしまおうがよい」

「阿難！」

「はい！」

「旗竿を倒しなさい」

阿難よ、正法眼蔵はその「はい」にあるのだ。長年の葛藤は終わった。なんじと我とは刹竿を立てて張りあっているとはいけない。双方ともにいまや立ててあった刹竿を倒すのだ。一つお前の手で双方の刹竿をぶっ倒すがよい。

魚返善雄氏の訳ではこのようになっていきます。(『禅問答四十八章』)

ここに時ならぬ春が来て花爛漫

ここに時ならぬ春が来て花爛漫

修行の話ですが、釈尊の門下にはこれとは逆に桁はずれに頭のわるい人の修行の例が伝えられています。亡くなった後のお墓のまわりには若荷が生えてきたというあの周利槃特という修行僧の話です。

周利槃特はとても頭がわるくて、十を聞いて十を忘れるというくらいでした。あるとき彼は精舎の入り口で涙にくれていました。托鉢から帰ってきた釈尊が彼に問いかけたのです。

「比丘よ、そなたはなぜそのように悲しんでいるのか」

「世尊よ、私は兄の摩訶槃特にひどく叱られました。私は戒律のことが覚えられず直ぐに忘れてしまつて、そのために戒律が保てないのです。そんなことではとても見込みがないから、在家にかえれと兄が言うのです」

「そうか、そなたは何一つ覚えられないのか」

「はい、何一つ覚えられません」

かな部屋につれて行き、そこに坐らせて一本の箒を授け「よいか、この箒で塵を掃い、垢を除こう。さあ、言つてごらん、この箒で、塵を掃い、垢を除こう」

周利槃特は幾度も幾度もやつてみました。鈍中の鈍として大衆に笑われた彼のことです。この句がなかなか覚えられませんでした。後の句を誦すれば

しかし彼は懸命になつてやつとこの句を覚えてたのです。そうしてこれだけを忘れないようにして掃除を続け年月をすごしました。世尊に授けられた箒をいつも側に置いています。それが彼の記憶をいつも呼びよしましたのです。

あるとき、槃特は釈尊の前に進み出て言いました。

「世尊よ、おかげさまで智慧を得ました。お言葉の意味もわかりました」

「比丘よ、どうわかつたのか」

さて話を戻し、阿難には前号で触れたようにもう一つの大きな功績がありました。

釈尊はこれを聞いて深く感動し、心から喜びました。周利槃特は阿羅漢果を得たのです。

さて話を戻し、阿難の世に存在しているのは阿難のおかげなのです。釈尊は当初、仏教という宗教を、男性のための修行組織として設立しました。「女性を排除する」というわけではなく、色慾沙汰を離れた独身の男だけが集まって、平安な暮らしの中で悟りを目指すというコンセプトで、組織を設計したのです。だから初めは、お坊さんは全員男性だったのです。

釈尊の父、浄飯王の最初の妻は摩耶(マヤ)、その摩耶から釈尊が生まれました。摩耶の亡くなった後、摩耶の妹だった摩訶波闍耶提(マハー・ブラジヤーパーティ)が新しい妻になりました。この叔母から皇太子の難陀が生れたのです。この難陀が次の王の地位を捨てて釈尊の教団に入信してしまつたのです。続いて、釈尊の息子で、浄飯王の嫡孫なる羅喉羅も釈尊に

しかし釈尊は、叔母であり義理の母の願いを許そうとされませんでした。

帰依しました。やがて浄飯王は亡くなり、取り残された波提夫人の孤独感や寂しさはひとしおだつたと思えます。息子の難陀と孫の羅喉羅は仏門に帰依して、いまや頼みの夫も先立ってしまつたのです。

ここで、深く無常を観じて菩提心を起こした夫人は、老いの身ながらも出家の思いを懐きました。そこで自分の甥であり義理の息子の甥である釈尊に使者をたて切に出家のことを願ったのです。

「思いとどまられるがよい。出家の修行はきびしくて、年老いた女性の身には堪え難いではありませんよ」

それでも夫人は諦めきれずに再三出家を願ひ出しました。しかし、その願いはなかなか許されません。夫人は釈尊を慕つてガンジス河の北方ヴァシヤリの地まで歩いて行きました。一族の志を同じくする婦人たちと一緒に

思えば阿難がいなかったら、女性、すなわち人類の半数に対して仏教は門を閉ざしたままであつたに違いありません。今も多くの尼寺では阿難を特別に供養しているのです。

たつた一人の女性を救おうとした阿難の思ひは、その後の数方、数十万の女性に修行の道を開いてくれました。これは男女の性の垣根を取り払った、当時としては思い切った改革だつたのです。



この第一結集において、釈迦の遺した教えは多くの優れた弟子たちの確認を得ながら編纂され、そしてこれが、その後さらに少しずつ整理・編集されながら、パーリ語の初期仏典(三蔵)になり、今日の仏教の教理教説の中核になりました。

すなわち正法眼蔵を迦葉だけに伝えました。この場面を「拈華微笑」といって、以心伝心の極致といわれ続けています。この正法眼蔵の付与があったときに、釈尊は阿難に向って、「そなたは今後、迦葉に師事して、迦葉から正法眼蔵を受け継ぐがよい」とねんごろに諭されました。阿難は素直に「はい」と答えて迦葉に随従し、さ

らに二十年のあいだ修行を続けたのです。釈尊の一番近いところで仕えて二十年間も修行に励んだのでありながら、ダイレクトに釈尊から究極の法は授けられなかった。ここが仏法、特に禅の特質になるのかもしれない。二十年間、釈尊のそばで説法を聞き、

「多聞第一」と呼ばれた阿難でしたが、釈尊の生前には、悟りを開くのに到りませんでした。そんな阿難が、大悟に到るきっかけとなったエピソードがあります。



釈尊がお亡くなりになられた後、阿難は昼に夜にと多くの説法会を開いていました。阿難は坐禅の時間もとれぬほど多忙な日々であったそうです。それを見かねたある修行者が次のような詩を示しました。

樹下において思ふを凝らせば
心、涅槃にゆか
ん、
禅、放逸なるなか
れ
多く説くも何か
あらん

放逸とは、怠けること、疎かにすることを意味しますが、ここでは特に教えを説くことに重きを置いていた阿難に、坐禅修行に励めと示しています。この詩をよんで阿難は心を入れ替え坐禅に励み、大悟に近づいたといわれています。



例えは、電車やバスでお年寄りが立っていたら、私達には席を譲ろうかなと湧いてきくが少なからず湧いてきます。人間には、人さまに優しくできる仏の心が、生まれつき具わっています。しかし、そう思ってもすぐに行動出来ない時があります。恥ずかしいという

昔、中国の唐代の白樂天という詩人が、道林和尚という禅僧に「仏法の真髓とは何ですか」と質問すると、
諸悪莫作
衆善奉行
「悪いことをするな、善いことをせよ」と答えます。
白樂天は、「そんなことは、三歳の子供でも知っていますよ」と言い返しますが、道林和尚は「三歳の子供が知っていても、八十歳の老人ですらこれを実行することはむずかしいですぞ!」と応じたという逸話が伝わっています。
頭で理解出来ること、なかなか実行に移せないのが私達人間です。

梅花講員の皆様は、お寺に集う事をひとつの楽しみとして練習に励み、その練習の成果は、お寺の法要や檀信徒のお葬儀などの場面で、皆様のお耳に届けられ、聴く方の心に寄り添い癒します



梅花流詠讚歌

講員募集



三宝御和讃
心の闇を照らします
いとも尊きみ仏の
誓願を冀うものはみな
南無帰依仏と唱えよや
憂き世の波を乗り越えて
浄きめぐみにゆく法の
船に棹さすものはみな
南無帰依法と唱えよや
悟りの岸にわたるべき
道を伝えしものろもろの
僧伽に頼るものはみな
南無帰依僧と唱えよや

御詠歌とは、お釈迦さまの教えをわかりやすく歌にしたものが始まりとされております。
近代以前の巡礼歌を源流とする御詠歌の伝統を受け、大正時代に大和流が誕生し、さらに臨済宗では花園流、真言宗では密厳流が創設され、曹洞宗では梅花流詠讚歌が昭和二十七年に誕生しました。
まさに日本仏教の歴史と共に御詠歌の歴史も歩んできたのです。亡き方のご供養の為、また、み仏の教えに触れる第一歩として、是非ご一緒に御詠歌をはじめてみませんか。ご希望の方は桃源院までお問い合わせください。

